

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

8 ARTA NSX-GT

55 ARTA NSX-GT3



DESIRE COMES TRUE

2019 ARTA DIGITAL Rd.8 TWINRING MOTEGI

「ついに辿り着いた、悲願成就」

最終戦ツインリンクもてぎには、いろんな感情が渦巻いていた。

GT300 クラスを戦う 55 号車 ARTA NSX GT3 の面々は、4 位以内に入りさえすれば獲得できる悲願のチャンピオンに向けて。そして GT500 クラスを戦う 8 号車 ARTA NSX-GT の面々は、来季のマシン設計変更に向けてミッドシップマシン最後の走行となるこのレースでの好走を、ホンダ陣営の中でも自分たちが果たそうと。

その緊張感からか、もてぎのスターティンググリッドにはいつもとは違う外界と遮断されたような静けさが漂っていた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

55号車のコクピットに収まった高木真一も、エンジニアの一瀬俊浩も、エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市も、それをどこかで感じ取っていたのかもしれない。今年のARTAはさらに力強く成長したとはいえ、12点差を逆転されタイトルに手が届かなかった1年前の悪夢も脳裏によぎる。

一瀬「路面温度は変わらず27度。昨日よりは2度くらい低いかな。基本のフォーメーションは左2輪交換。ピットインは15周目からできますが、500が入る前に16周目か17周目に入れると思います」

高木「お願いします、皆さん。気合い入れて行きますよ」

土屋「いつも通り、集中していこう！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

高木は5番グリッドから好スタートを決め、バックストレートエンドで気合いのオーバーテイクを見せ、自力でタイトルが決まる射程圏である4位にポジションを上げてきた。

高木「(65号車) レオンの後ろはどのくらい？」

一瀬「レオンの後ろは3秒ある」

高木「マクラーレンは誰？」

一瀬「(アレックス・) パロウです」

前後の状況をいつも以上に慎重に正確に把握しながら、攻めるところは攻め、守るところは守って大事に走る。タイトルという最終目標を視野に、ARTAは今シーズンずっとそうしてきた。それでもいつも以上に1周1周にかけるその思いは強い。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

8 周目には 3 位にポジションを上げ、順調に悲願に向けて歩みを重ねていく。

高木「ちょっとクルマがオーバー気味だね」

一瀬「了解」

マシンのフィーリングは決して最高とは言えず、高木はタイヤのグリップ低下も感じていた。

ピットストップを前に当初計画していた片側 2 輪交換では後半が厳しくなる可能性を一瀬と話し合う。

一瀬「ミニマムまであと 5 周。タイヤはどう？」

高木「余裕があれば全部換えたいなあ、これは！最悪でも左だけ交換だね」

一瀬「了解、96 の動きを見て考える」

高木「今結構 4 コーナーがギリ」

一瀬「了解」

タイトルを争う 96 号車はまだ遥か後方にいる。そのギャップを見て一瀬は 4 輪交換を決断し、守りのレースではなく攻めのレースに出た。

一瀬「タイム的には今全車の中で一番速い。96 とは 20 秒以上ギャップがあるから 4 輪変えても大丈夫」

高木「右のタイヤも結構キツいのはキツよ」

一瀬「了解、じゃあ 4 輪交換で行きましょう」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



17 周目、高木に対してピットインの指示が出され、高木は自分の仕事を全て終えて福住仁嶺に最後のバトンを託す。
GT500 クラスを戦う 8 号車も、55 号車の戦略を最優先に考えてそのピット作業を待っている。
一瀬「これでピットイン。4 輪交換ね、フルプッシュ！」

高木「はいよ！」

土屋「みんな、頼むよ！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



一方、8号車 ARTA NSX-GT を駆る伊沢拓也は、ミッドシップ最後の予選で自分たちがその最上位を獲りたいという、ひとかたならぬ思いを持って臨んでいた。Q2 のアタックで燃料系トラブルに見舞われコース脇に止まってしまった消化不良の思いを、この決勝で存分に晴らしたいと思っていた。



AUTORACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

8番手からスタートし、2周目にはポジションアップ。
今季を通した ARTA の速さを振り返れば、トラブルさえなければ上位グリッドに行けたはずで、本来ならばこのポジションに留まっているはずがないのだから当然だった。
エンジニアの星学文からの情報を受け、伊沢はさらにペースを上げていく。
星「後ろは1号車に変わっています。
前の23号車のペースが悪そうに見える。頑張りましょう」
伊沢「了解、了解」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

いつも通り伊沢はマシンの挙動を繊細に感じ取ってフィードバックし次のスティントに備える。

伊沢「内圧はフロントがちょうどいいくらい。そんなに悪いところにはいない」

星「バランスは大丈夫？」

伊沢「そうね、リアのブレーキがちょっと軽いかなと思うくらい。」

星「ちょっとずつトップとのギャップが縮まっているから、ここが頑張りどころです。頑張りましょう」

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

19 周目にライバルたちがピットインを始めたが、ちょうど 55 号車がピット作業を控えていたこともあってタイトルを争うそちらの作業を優先した。

星「55 号車が入るのでもう 1 周いきしょう」

伊沢「この周みんなピット入ったよ」

星「この周入りましょう」

伊沢「了解」伊沢は 20 周を走ったところでピットに飛び込んで野尻智紀にバトンタッチした。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

野尻はピットアウト直後からポジション争いの真っ只中だったため
プッシュを要求されたが、しっかりとそれに応じて同じホンダ NSX-GT
勢の 17 号車と争っていく。

星「ここプッシュだよ、頑張るよ」

野尻「これはどっちのタイヤ？」

星「伊沢くんと同じ硬い方のタイヤだよ。今ポジション 5。まだピット
インしていないのは 17 号車。17 号車との戦いだからここは頑張ろう」

野尻はしっかりと仕事を果たし、ピットアウトした 17 号車の前に出て
4 番手にポジションを上げた。

星「よし、これで 17 号車の前に出られたよ。4 番手。後ろは 38 号車
でギャップは 5 秒」

後続とのギャップは広がっていく。

星「後ろのギャップは 6.2。開いているから前だけに集中しよう」

星「野尻、良いペースだよ。前とのギャップが縮まってる。残り 22 周」

野尻は好ペースで前を追いかけて、2 位争いの背後まで追い付いてきた。
そんな矢先の 39 周目、8 号車は突然トラブルに見舞われた。急にギア
ボックスが作動しなくなってしまったのだ。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



野尻「うわぁ～、壊れた！シフトが変わらない！」

星「もう少し上げ下げしてみて。アラームが出てる？」

野尻「出てる。シフトプッシャー LOW」

星「ダメだな、それは……」

野尻「時間が経てば戻るけど、またダメになる」

星「戻ろう、この周ピット。ごめんなさい。良いところまで来てたのに……。

クルマを見て時間が間に合ったら最後に伊沢くんを乗せてコースに戻ろう」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



ARTA

BRIDGESTONE

CVSTOS

予選でも決勝でもミドシップ勢最上位にという思いは果たせないまま終わってしまった。せめて、ミドシップ最後の瞬間はコース上にいたい。そう願う伊沢の思いなんとか叶えようと、ARTA はマシンを修理し、再びコースへと送り出した。
星「残り6周です。タイヤが冷えているので気をつけてください」
伊沢「前のヨコハマに追い付いちゃったけど、邪魔したくないからゆっくり走るね」
星「了解」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

そして6周遅れの最下位 13 位でフィニッシュ。

伊沢「すみません、最後ワガママを言って乗せてもらって」

星「トラブルがなければ4位でフィニッシュできていたはずなのに……」

伊沢「それまではホンダランキングでも一番上だったし。しょうがないけどね。1年間お疲れ様でした、ありがとうございました」

星「こちらこそ、ありがとうございました」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

そして福住がステアリングを握った 55 号車 ARTA NSX GT3 は 3 位を走り、着実にタイトルへ向けて周回を重ねていた。しかしタイヤにゴムカスが付着してグリップが低下する症状に苦しみ始めていた。リアのグリップが低下して不安定になり、福住はオーバーステア傾向と戦いながらのドライビングを強いられていた。



一瀬「今 11 号車が 4 輪交換でアウトラップ」

福住「ちょっとリアにピックアップがあってオーバーステアが強いです」

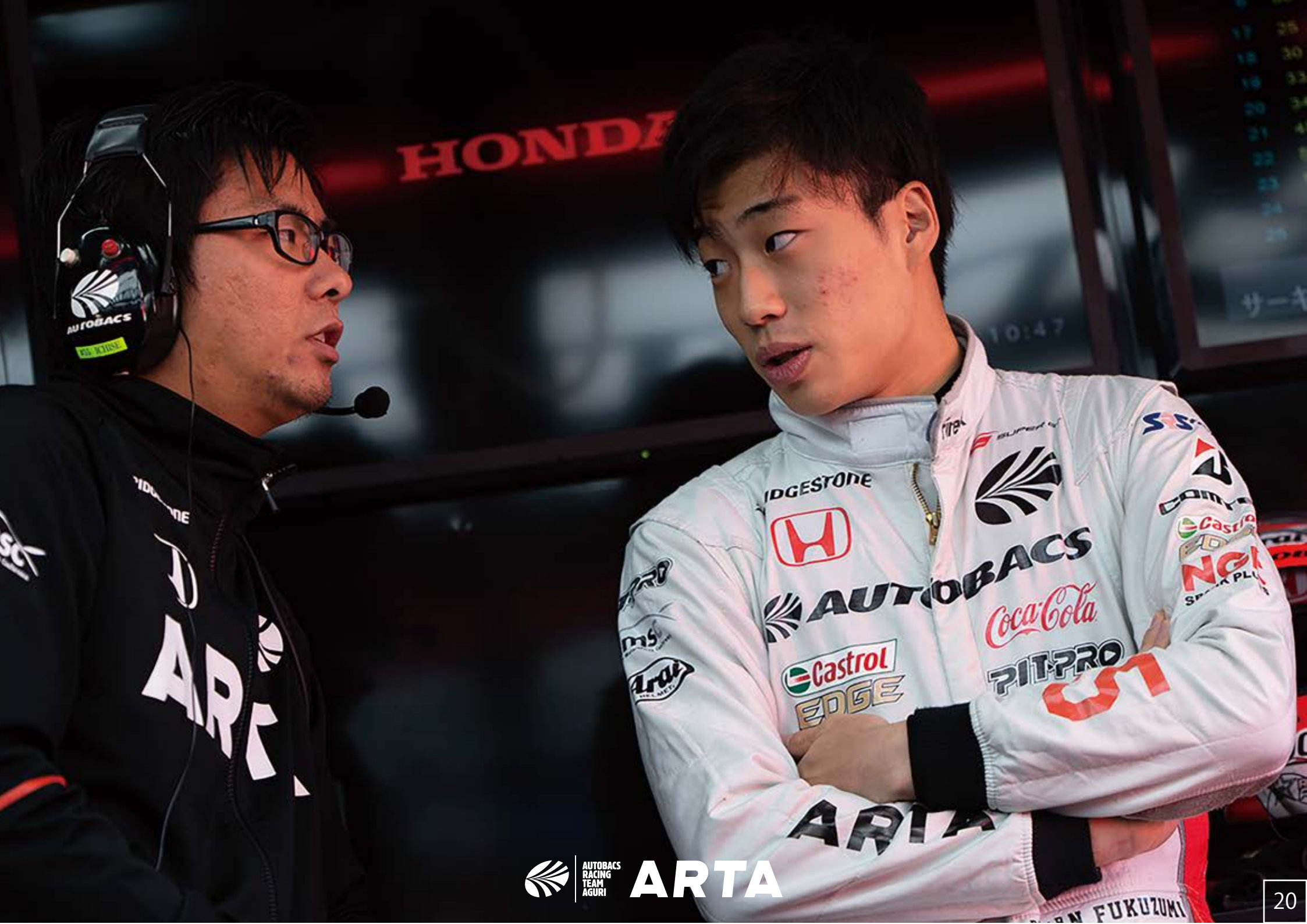
一瀬「了解、横めにタイヤを使うとピックアップが付きやすいからタテ目に走って」

後ろから 4 号車が迫り、抑え切るのは難しいくらいのペース差だった。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



福住「ああ、これは抑え切れないと思う」

一瀬「了解、良いよ大丈夫だよ。96 とはまだ 20 秒以上ギャップがあるからこのまま行こう」

福住「ドオーバーでダメだ……」

一瀬「4 号車を行かせても良いからね」

全車がピットストップを終えた時点で 4 位。

状況は楽ではないが、チャンピオンは十分に射程圏内に捕らえている。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

土屋「仁嶺、お前もキツイと思うけど後ろの初音ミクの方がキツイだよ、頑張れ！」

一瀬「3位の56号車がスロー走行してる」

福住「あ、止まってる」

一瀬「これでポジション3。残り17周。ちょっとツライかもしれないけど、タイムはトップと変わらないからね」

福住「了解」

しかしピックアップの症状はさらに悪化してフロントタイヤにもグリップ低下の傾向が出て来た。福住はタイトル争いを演じるライバルの96号車の状況を確認しながら、決して無理をせず、確実にマシンをゴールに運ぶドライビングを展開していた。

福住「ああ、ヤバい。ピックアップがヤバい」

土屋「前も後ろも仁嶺とタイムは変わらないよ、頑張れ！」

福住「96に抜かれるとどうなの？」

一瀬「96に抜かれても大丈夫。今ギャップ6秒。もし96が速いようなら行かせても大丈夫だよ」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

今の ARTA が必要としているのは目の前のポジションひとつではなく、2019 年のチャンピオンシップという大きな目標だ。それを掴み取るためには、無謀なバトルをして消耗するのではなく、クレバーなレースをすることもまた必要だった。福住はドライバーとしての本能をグッところえて 96 号車を前に行かせ、表彰台を諦めてでも 4 位を死守する走りに切り替えた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

一瀬「後ろは4号車でギャップ6秒。ラップタイムはウチの方が0.5秒速いよ。」

福住「あと何周？」

一瀬「あと5周」

福住「もう4輪ともヤバイよ。こんなにピックアップする理由がよく分からないんだけど」

一瀬「あと4周だよ、頑張れ」

土屋「仁嶺、踏ん張れよ！」

福住「分かってまあ〜す！頑張ってる！」

そしてARTAがずっと待ち望んできた栄光のチェッカーダフラッグまであと1周となった。

あまりに集中して走っていたのか、一瀬からの「これでファイナルラップ」という無線に「了解」と答えていたにもかかわらず、ゴールまであと僅かとなったところで福住から驚くような無線が入ってきた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



福住「これ、最終ラップに入ってる？ 覚えてないんだけど」
一瀬「最終ラップ、最終ラップ。ホームストレートでゴールだよ」
最後の最後まで、あまりに福住らしいレース。

そして福住は4位でチェッカーカードフラッグを受け、55号車 ARTA NSX GT3 の2019年チャンピオン戴冠が決まった。
その瞬間、ピットガレージは歓喜に沸き上がり、2002年以来のチャンピオン獲得となった高木の目には光るものが見えた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
131
LAP

AUTOBACS
155
2019 GT300
CHAMPION



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



一瀬「OK、お疲れ！ポジション4」

福住「え、確定!？」

一瀬「確定、チャンピオン確定だよ！」

福住「よ～し！良かったあ～、ツラかったあ～。前後ともピックアップしちゃって全然速く走れなかったけど、高木さんが速く走ってくれたから良かった。本当にありがとうございます！」

土屋「良かった！お疲れ！みんなもお疲れ！」

福住「よっしゃあ～っ！高木さんの無線がないなあ～」

高木「仁嶺～！やったよお～、チャンピオンだ～！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



今年の55号車は速さを磨いただけでなく、全戦でポイントを獲得する強さも手に入れた。それがこのタイトル獲得に繋がった。8号車は速さを一層磨いてホンダ勢のトップを張る場面も増えたが、まさしく最終戦がそうであったように不運もあっていくつかのレースを落とし、タイトル争いに加わることはできなかった。それでも頂点への歩みは確実に前へと進んでいる。他でもない55号車の頂点制覇が、そのことを証明している。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



鈴木亜久里監督にも、久々に満面の笑みが浮かんだ。

「GT500 クラスは8番手からのスタートだったけど、ピット作業もノーミスでトップ争いのところまで来て、ドライバーは2人とも良い仕事してくれたのに、メカニカルトラブルで2人の足を引っ張ってしまって残念な思いをさせてしまった。GT300 クラスはドライバー2人もメカニック達も良い仕事をしてくれたし、K-Tune や LEON も良いライバルとしていいレースが出来たのは良かった。どこがチャンピオンになってもおかしくなかった中で、その中でチャンピオンを獲れたのは良かったと思っています。今年も1年間ご支援、ご声援下さったファンの皆さま、協賛企業の皆さまに厚く御礼申し上げます。来年もどうぞ宜しくお願いします」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



55
ARTA
2019 GT300 CLASS
CHAMPION
BRIDGESTONE

 **AUTOBACS**



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

**AUTOBACS
SUPER GT
2019 SERIES**

CHAMPION

GT 3000

長く険しい戦いは終わった。
しかしこれはまた新たな戦いの始まりでしかない。
頂点を極めるその日まで、ARTA の戦いは続くのだ。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

8

ARTA NSX-GT

Honda Racing

🇯🇵 T.NOJIRI

🇯🇵 T.IZAWA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



株式会社オートバックスセブン

ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



ARTA Project



ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

ZERO
BORDER
Team ZEROBORDER

©2019 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD